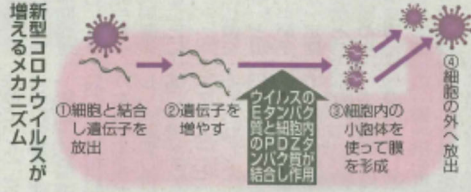


コロナ増殖の仕組み解明

「第3の新薬」足掛かりに

弘大など研究

弘前大学農学生命科学部の森田英嗣准教授らの研究グループは、新型コロナウイルスが増殖する仕組みの一部を解明し、今月中旬に米電子版科学誌「生物学ジャーナル」で発表した。森田准教授は「今ある2種の抗コロナ薬とは異なる、第3の新薬開発につながる成果」と話している。(赤田和俊)



森田准教授と研究に使ったパイオセーフティレベル3の実験室

森田准教授によると、人間などの細胞に結合したウイルスは、細胞内で自身の遺伝子を増やした後、細胞にある「小胞体」の膜を使って球状の粒子を作り、細胞から出て感染を広げる。弘大の森田研究室は、ウイルスが粒子の膜を形成するには、ウイルスが持つエンペロープ(E)タンパク質と細胞内のPDZタンパク質の結合が欠かせないことを発見した。森田准教授は「二つのタンパク質の結合を阻めば粒子は作られず、感染を止められる」と強調する。

今回の研究は、名古屋大学や大阪医科大学との共同事業。名古屋大チームが二つのタンパク質の結合を阻む化合物を作成中で、大阪医科大学大チームが実証試験を担う。

現在、新型コロナウイルスス薬には、遺伝子の複製を阻害するタイプと、複製時に働く酵素を抑えるタイプの2種類があるという。森田准教授は「今回の発見から作られる薬は単体でも効果が期待できるし、今ある二つの薬と組み合わせれば相乗効果も出る」と話す。

今回の研究は、昨年9月に弘大が開設した、ウイルスの流出を防ぐ能力が高い「パイオセーフティレベル3」の実験室を使った初の成果。森田准教授は「新型コロナウイルスのような、感染力や病原性の高いウイルスを扱えるようになった。より

高度な研究に取り組める」と話している。

この画像は、当該ページに限って”東奥日報社”が利用を許諾したものです。無断転載はできません。